1．はじめに

平成29年（2017）に東弓削遺跡（東弓削三丁目地内）で行った発掘調査において、称徳天皇と僧 道鏡が建立した由義寺の塔基壇跡が発見されました。基壇は一辺約21ｍで、国家官寺である大安寺（奈良市）に匹敵する規模を有していました。この発見を受け、平成30年（2018）２月13日に、塔基壇跡とその周囲一帯約１万㎡が「由義寺跡」として国の史跡に指定されました。

八尾市では、国史跡指定以降、史跡整備に向けた発掘調査を平成30年（2018）、令和２年（2020）、令和３年（2021）、令和４年（2022）の４回にわたって行ってきました。これら一連の発掘調査によって、史跡指定地内の遺跡の状況や塔基壇の規模・構築に関わる工法がわかってきました。さらに令和4年（2022）の塔基壇東面の調査において、塔基壇の下層から前身の建物とみられる基壇跡が確認されました。

今回、令和５年４月から第５次発掘調査を開始し、塔基壇南端の状況と下層基壇の南端を確認することを目的とした調査を行いました。

2．調査成果

a.上層基壇（由義寺塔基壇）

調査区の中央北側で塔基壇の南側を確認しました。基壇上面に設置されていた礎石や基壇外装(註1)は失われていましたが、基壇構築の基盤となる地面から上に約0.6mが残っていました。基壇土は版築(註2)（シルトと粗砂の互層）で造られていました。残存する基壇の上面では、0.4m前後の石がほぼ同じ高さで置かれていました。この石は、基壇土を強固にするために入れ込まれた可能性があります。

調査区の南側で凝灰岩の破片を含んだ溝を確認しました。この溝は基壇四方で見つかっています。溝の中心付近を結ぶと一辺21.6m（72尺）の正方形となり、基壇規模を復元する際の根拠となった遺構になります。また、基壇規模や凝灰岩の出土から、塔基壇は「壇正積基壇」(註3)であったと考えられます。基壇の西面階段にあたる部分で幅広となることがわかっており、今回、南北幅が広くなることを確認しました。このことから、南面階段の位置や構造を復元する上で重要な成果を得ることができました。

塔基壇の構築時期は、基壇周辺から奈良時代後期の軒瓦が出土していることや、平成29年（2017）の調査で、基壇中央の基壇版築層から神功開寶（765年初鋳）が出土していること、さらに、『続日本紀』神護景雲四年（770年）に塔の建設に携わった者に位階を与えるとの記事から、奈良時代後期頃に塔は完成していたと考えられます。

b.下層基壇

調査区の中央西側で塔基壇の断割りを行い、下層基壇を確認しました。基壇土は高さ0.2mが残り、上層基壇同様に版築で造られていました。その下層で掘込地業(註4)の痕跡を確認しました。旧地表にあたる褐色の粗砂層を約0.7m掘り込み、その中に0.2～0.5mの花崗岩を入れ、丁寧な版築を施していました。最下層には0.5mを超える石を据えていました。これらは湧水の激しいこの場所において建物の地盤沈下を防ぐために行われた土木工事の痕跡とみられ、高度な技術が用いられたことがうかがえます。

掘込地業のはじまりの高さに近い場所に、平たい面を外側に向けた0.5mの石が設置されていました。同じような石を下層基壇東面でも確認しています。これらは基壇構築時に設置された石（見切石）と考えられ、基壇四方の辺に並べられていたとみられます。

平成30年（2018）、令和4年（2022）、今回の調査で、掘込地業の痕跡を四方で確認することができました。各辺の内側を結ぶと東西約17m、南北約17mの正方形に復元でき、掘込地業の規模と基壇の規模が同一と考えた場合、下層に存在した建物は、一辺約17mの塔基壇と考えることができます。これは全国の国分寺と同規模で、近隣の古代寺院跡では柏原市の智識寺や河内国分寺に匹敵する大きさになります。

下層基壇の構築時期は、現在、出土遺物の分析を進めているところですが、平成30年（2018）調査の下層基壇西面の掘込地業から一枚作りの平瓦が出土しており、奈良時代中頃以降と考えられます。

3．まとめ

今回の調査で下層基壇が正方形で塔基壇であることがわかりました。下層基壇と由義寺塔は東の辺を合わせて造られ、下層基壇を活かしつつ、その上面に最大0.5mの整地を行い、約1.3倍の大きさの塔が構築されていました。下層基壇は、土層の堆積状況から由義寺の前身寺院である弓削寺の建物の可能性があります。塔の規模が拡大された理由としては、称徳天皇による由義宮・西京(註5)の造営に伴い、国家の寺院にふさわしい規模に造り替えたと考えることができます。

当初の塔を造り替えて、大きな塔に計画変更したという例は他になく、貴重な事例といえます。由義寺の建立過程を考えるうえで重要な成果を得ることができました。

註１　基壇土の外面を保護・装飾するためのもの。
註２　土質の異なる土を薄く交互に層状につき固めながら盛り上げていく工法。
註３　凝灰岩や花崗岩などの切石により構築された基壇。葛石・羽目石・束石・地覆石で構成され、基壇建物の中で最も格式が高いとされる。
註４　建物の基礎となる地面を掘り下げ、内部をつき固めながら埋戻す地盤改良工事。
註５　称徳天皇が弓削の地に造営をすすめた宮都

大阪府八尾市　史跡由義寺跡
第５次発掘調査現地説明会資料
2023年６月24日（土）八尾市魅力創造部観光・文化財課

大阪府八尾市　# 史跡由義寺跡

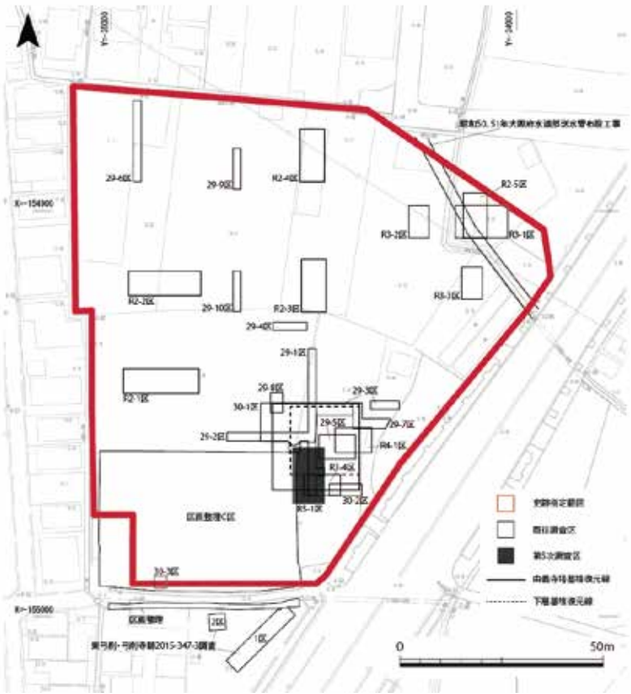
第５次発掘調査現地説明会資料

2023年６月24日（土）八尾市魅力創造部観光・文化財課

史跡由義寺跡の位置

由義寺（弓削寺）関連年表

天皇	西暦	年号	月	おもなできごと
聖武	742	天平14	12	弓削寺の僧 行聖が得度（出家）者を推挙する【弓削寺の初見】
	747	天平19	6	「沙弥道鏡」が東大寺の僧・良弁の使者となる【道鏡の初見・「正倉院文書」】
孝謙	749	天平勝宝元	7	阿倍内親王が即位する（孝謙天皇）
淳仁	758	天平宝字2	8	孝謙天皇が譲位し、大炊王が即位する（淳仁天皇）
	761	天平宝字5	10	保良宮（滋賀県大津市）に孝謙太上天皇が行幸し、看病にあたった道鏡を信頼する
	763	天平宝字7	9	道鏡が少僧都になる
	764	天平宝字8	10	淳仁天皇を廃し、孝謙太上天皇が重祚する（称徳天皇）
称徳	765	天平神護元	9	神功開宝を鋳造する
			10～閏10	称徳天皇第1回目の河内国への行幸：5日間 10月29日　紀伊国への行幸の帰り、弓削行宮に入る 10月30日　弓削寺で仏を礼拝する 閏10月1日　弓削寺に食封200戸、智識寺に50戸を施入する 閏10月2日　道鏡を太政大臣禅師に任じ、文武百官に拝賀させる／弓削寺で仏を礼拝する 閏10月3日　大県・若江郡の調・租を免じ、平城宮への帰途につく
			閏10	平城宮で留守百官が道鏡を拝賀する
	766	天平神護2	10	道鏡を法王とする
	768	神護景雲2	2	弓削浄人（道鏡の弟）を大納言とする
	769	神護景雲3	1	平城宮西宮で大臣以下が道鏡を拝賀する
			5～9	宇佐八幡神託事件
			10～11	称徳天皇第2回目の河内国への行幸：23日間 10月17日　由義宮に行幸【由義宮の初見】 10月21日　龍華寺の西の川辺に遊覧し、同寺に難波宮の綿・塩を施入する 10月30日　由義宮を中心とした地域を西京とし、河内国を河内職にする 11月9日　平城宮にもどる
	770	神護景雲4	1	由義宮の範囲に家がある大県・若江・高安郡の人々に補償を行う
			2～4	称徳天皇第3回目の河内国への行幸：39日間 2月27日　由義宮に行幸する 3月3日　博多川のほとりで宴をおこなう 3月28日　葛井・船・津・文・武生・蔵の六氏の男女230人の歌垣がおこなわれる 4月1日　造由義大宮司の次官を任命する 4月5日　由義寺の塔の建設に伴い、諸司の人・雑工ら95人に位階をあたえる【由義寺の初見】 4月6日　平城宮にもどる
			7	志紀・渋川・茨田などの堤を修造する
			8	4日　称徳天皇が平城宮西宮で亡くなる 17日　称徳天皇、高野山陵（奈良県奈良市）に葬られる 21日　道鏡を下野薬師寺（栃木県下野市）の造寺別当に任じて発遣する 22日　弓削浄人らが土佐国（高知県）に流される 26日　河内職を河内国にもどす
光仁		宝亀元	10	白壁王が即位する（光仁天皇）
	772	宝亀3	4	道鏡、下野で亡くなる



令和５年度の調査位置